昭和文学全集

15

石川淳

武田泰淳

三島由紀夫

安部公房

小学館

昭和文学全集

15

石川淳

武田泰淳

三島由紀夫

安部公房

小学館

昭和文学全集
第15巻

昭和六二年二月一日　初版第一刷発行

著者　石川淳　武田泰淳　三島由紀夫　安部公房

発行者　相賀徹夫
発行所　小学館
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八一一〇〇一番
電話　編集・〇三(二二三〇)五六九六
業務・〇三(二二三〇)五三〇〇
販売・〇三(二二三〇)五七一九

印刷　大日本印刷株式会社
製本　大日本印刷株式会社
若林製本工場
用紙　三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568015-6
© JUN ISHIKAWA YURIKO TAKEDA
YOKO HIRAOKA KOBO ABE 1987

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

石川淳　5
7　普賢
58　マルスの歌
71　焼跡のイエス
79　かよい小町
94　雪のイヴ
105　おとしばなし　尭舜
111　鷹
137　紫苑物語
163　森鷗外
江戸文学掌記より

242　遊民
246　其角

武田泰淳　257
259　司馬遷
344　蝮のすえ
378　風媒花
495　滅亡について
500　目まいのする散歩

三島由紀夫　509
511　金閣寺
623　午後の曳航
687　橋づくし
696　憂国
708　荒野より
716　蘭陵王
720　サド侯爵夫人
安部公房　761
763　壁
S・カルマ氏の犯罪
バベルの塔の狸
赤い繭
858　箱男
939　友達
980　緑色のストッキング
1013　作家アルバム
解説
1021　石川淳……野口武彦
1029　武田泰淳……粟津則雄
1036　三島由紀夫……磯田光一
1043　安部公房……平岡篤頼
年譜
1050　石川淳……鈴木貞美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1057　武田泰淳……古林尚
1062　三島由紀夫……磯田光一
1067　安部公房……谷真介
1072　底本について
1073　用字用語について

石川淳

普　賢

一

盤上に散った水滴が変り玉のようにきらきらするのを手に取り上げて見ればつい消えうせてしまうごとく、かりに物語にでも書くとして垂井茂市を見直す段になるとこれはもう異様の人物にあらず、どうしてこんなものにこころ惹かれたのかとだまされたような気がするのは、元来物語の世界の風は娑婆の風とはまた格別なもので、地を払って七天の高きに舞い上るいきおいに紛紛たる浮世の塵人情の滓など吹き落されてしまうためであろうか、それにしてもこれはちょっと鼻をつまめばすぐ息がとまるであろうほどたわいのなさすぎる男なのだ。しかしそんな取柄のない男のどこがおもしろいかといえばじつにその取柄のなさ加減で、これほどつまらぬところばかりで出来上っている人間もないものだと、こう捏ねかえしはじめてはきりのないはなしであるが、それはなにも宿酔のわたしの頭が混沌としているせいばかりではなく、午前十時のベッドの中でもじもじしている所在なさの妄想であろう。そもそもこのベッドというのが垂井茂市のベッドであってみれば、やはり念頭にちらつくのは……ええ、もう垂井茂市なんか鬼に食われろと、わたしはぱっと跳ねおき、アパートの重宝は室内に備えてある水道の栓をひねってじゃぶじゃぶと顔を洗いかけたとたん、外から扉をこつこつ、「垂井さん、垂井さん。」黙っていると、鍵のかかっていない扉を向うから押して鼻づらを突き出されたのではよんどころなく、「なんだ。」「日の出新聞ですが……」「何の用だ。」「御勘定をいただきに来たんです。」「今いないからわからない。」「あなた、垂井さんじゃないんですか。」「ちがう。ゆうべ初めて来て泊ったばかりだ。」「へえ。」「垂井はもう勤めに出かけた。」「いつごろお帰りです。」「わからない。」「もう二月たまってるんですが、いつ来ても居るひとが変ってるんで……」「そんなこと知るか。」「こまるんです、いつでも留守じゃ。」「こまっても仕方がない。まあまた来てみたまえ。」渋っている相手をやっと押し出した扉の外で、ばたばたと遠ざかって行く草履の音とともに残した捨ぜりふは、「ふん、だれがだれだかわかりやしねえや。」それはこちらも同然で、垂井の巣ではあるもののいったいこの部屋の借主はなにものなのか、わたしもまだ知らないのだ。

昨夜、映画を見に来たかえりに新宿の裏町を歩いているとすれちがったのがこの茂市で、洋服だけはいつも気にしている流行型、ぴんと張ったポーラの肩をつぼめながら、「いや、どうも……」といくらかきまりわるげに作り笑いをして見せたのは二三ヶ月前わたしのところから持って行ったきりの時計のことをさしたのであろう、とたんに陽気な調子に変って、「ちょ、ちょっとそこで。よく知ってるうちがありますから。」なにもいわせず近くの小料理屋へわたしをつれこんだ手

ぎわはこれも芸のうちか、万事腰の軽いのを身上につい半年ばかり前まで浅草の某喜劇団の楽屋にうろついていた男である。といっても役者ではなく、裏方ともつかず、ある幹部役者の男衆同様に雑用をたしていたまでのことだが、もともと堅気の勤め人型に出来ているくせに地道の仕事には尻が据らず、やっともぐりこんだ盛り場の灯に当人は虻のように羽根をひろげ、劇団の名刺をもってあちこちに顔を出すとか、地廻りのたれかれに、やあ、やあと挨拶しながら仲見世を歩くとかわけもなくふわふわしていても、持前の泥臭さは茶色の山高帽をどうかぶり直そうと土地の水になじまぬうえに、頼みに思う幹部役者が一座を脱退して関西へ落ちた後は身の置場がなく、その役者の友だちであるわたしのところ、下谷車坂の借間の二階にころげて来たのがこの一月末で、ちょっと二三日が一週間になり半月になり、初めのうちはどこへ行くのか終日外に出ていたが、ついには行先もなくなったと見えて昼間も畳にごろりと伸びたきり、「あーあ、鯨になりてえなあ。ぽかっと浮いて、気がむいたときにぷうと潮をふいて、のんきでいいなあ、あーあ、鯨に……」「ここで鯨になられたんじゃぼくがこまるよ、茂ちゃん。何かいい口はないか。」「いいえ、あたしだっていつまでこちらに御迷惑をかけたかないんで。じつは政党のほうに偉型をひとり知ってるのがあるんで、いろいろ頼んでありますから、そのうちどうにかなると思うんです。もうじき……」「居るのはかまわないがね、狭いところに鼻を突きあわせてたんじゃきみも愉快じゃないだろうし、こっちにも仕事が……」「どうです、お仕事のほうは。なんていいましたっけね、クリ、クリスト……」わたしの書きかけているクリスティヌ・ド・ピザンの伝記についてこの男にはなす必要はないので、「ぼくのことよりきみのことさ。」「ええ、ですから、きょうもこれから……」と出て行ったのが数日かえらず、やがて十日ほどたってあらわれたときには質から出したばかりであろう畳皺のついたビロード襟の外套を著て、ホープの鑵を一つみやげに、「あたしも今度こういうことになりましたから。」とさし出した大型の名刺には神田の某無尽会社と勤め先を記し、自宅として四谷区番衆町×番地アパート紅花荘と町ところに電話番号まで刷りこんであった。「大した御出世だな。」「ええ、お陰さまで、これから堅気になってはたらきます。」「結構だ。」「ときに、ちょっと時計を借して下さいませんか。なに、あした持って上ります。近いうちに買おうと思ってるんですが、今夜会があるもんですから……」それ以後ざっと三月の余、昨夜偶然出逢ったのだが、「あれはうどかなくなったんで、今直しにやってあります。そのうちお届けいたします。」で時計のことはそのまま、小料理屋でちょっと飲んで「勘定」というと、「いいんです、ここは。まあ、よござんす。」と店の奥へ立って行き何やらひそひそ。外に出ると、「このさきにおもしろいうちがあるんですが……」二三軒まわるともう一時過ぎで、タクシイを呼ぼうとすると、「遅いから、あたしんとこへ泊ってったらどうです。まあ一遍来てみて下さい。じきそこです。」こうして遊廓裏のアパート紅花荘へ、部屋にはいるとすぐ、「十銭玉ありませんか。いえ、ガスをつけようと思って。」鑵をさかさに振るとばらばら番茶の屑がこぼれるばかりでは手詰りのていと見えたにも拘らず、家具調度の類は一応かたちをつけて、部屋に備附らしいベッド長椅子のほかに小さい書棚には通俗読物が五六冊、硝子棚には珈琲茶碗リキュール・グラス一揃、からながらジョニウォカの壜もならび、卓上に挿した芍薬は凋れてはいるが花瓶は九谷焼、壁にかかった袷の丹前は仕立おろしと見える八端、それに結城の半纏が重ねてあるのに、「ひどく納まってるじゃないか。」「いえ……」「きみひとりじゃないのか。」「ええ、ときどき友だちがやって来るんで……」おしゃべり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の舌が急にどもりがちになったのは知られたくない筋でもあるのかと、わたしはすすめられたベッドに、茂市は椅子の上にごろりと寝るとすぐ鼾になり、こうして一夜明けたこの朝の始末である。茂市は起きると茶も飲まずに、「どうぞごゆっくり。鍵は置いてきますから、おかえりのとき帳場に預けといて下さい。」と匆匆出て行ったところをみればともかく勤めはもっているのであろうが、無尽会社の月給といってもせいぜい四五十円止りと察せられる収入ではおそらく二十円は取られるにちがいないこの部屋の維持はおぼつかなく、なにか金の蔓を見つけたのかと、わたしは新聞配達を逐い払ったあとから部屋を出て戸口に「垂井」とならんで「寺尾」の名札を見上げたときにも別に不思議とは思わず、その「寺尾」がなにものであるか気にもとめずについ下谷の寓居に帰った。

さて、以上述べたところに嘘はないのだが、じつはわたしがその中で故意に語ることを避けた一くだりがある。理由はそれにふれることがいやであったというばかりだが、元来垂井茂市のはなしなどを喜びいさんでしゃべっているわけではなし、今下谷車坂の部屋にもどって来て書きかけのクリスティヌ・ド・ピザン伝の稿を続ける前に一応昨夜の顚末を思いかえしたにすぎぬことながら、好き嫌いをいうくらいならば初めから何もいわないに如かず、すでにはなしかけた以上ある部分だけをわざと伏せておくのは無意味と考えられるので、つぎにそれをつけ加えるとしよう。まず最初に寄った小料理屋で見かけた女のこと……いや、そんな取りとめのないはなしよりも、後におこったにがにがしい出来事を思いきってぶちまけてしまおう。

ありようは新宿裏から紅花荘まで来る途中、遊廓の中で三四十分ほどむだな時間がすごされたのだ。といっても女どもが目当ではなく、「どうです、ひやかしてみませんか。バーの設備などありますぜ。」と立ちどまった茂市が「ちょっと……」と手を出したのは先刻からこちらのふところを見すかしていたのであろう、札を一枚さらうとついかたわらの店先へ、そこにいた男と小声ではなしていたかと思うともう靴を脱ぎかけ、外のわたしにふり返って、「上りませんか。」二階であやしげな珈琲を飲んですぐバーのはずが別別の部屋に案内されるらしいのに、「茂ちゃん……」と呼びかけても先方は急に酔ったふりをして、「まあ、いいじゃありませんか。え、いいじゃありませんか。」と早くも廊下の角に消えてしまったので、わたしもやむをえず小さい部屋へ、さいわい案内して来た女がすぐ出て行った後でベッドの上にあお向けになり、赤い笠の附いたスタンドの下で遠くのレコードが時花唄を鳴らしているのを聞いていると、突然どたんばたんとひびきわたるさわぎは真向うの部屋らしく、もつれあったからだが扉にぶつかる物音につれて、「なめるねえ、野郎。てめえなんかになめられてて宿が歩けるかってんだ。なに、つれて来る。おもしれえ、つれて来い。何でもつれて来い、相手になってやらあ。」という罵声はまさしく茂市であった。「そんな乱暴……」「何が乱暴だ。ちゃんと下でわたりをつけの、おばさんにも通してあるんだ。あしたの朝まで梃でもうごかねえぞ。」「だってこのお部屋でこのお値段じゃショート・タイムで。お泊りなら……」「何をいってやがんでえ、てめえ時間がわからねえのか。今何時だと思う。」「いくら引け過ぎでもこれでお泊りなら下のお部屋で……」「ふざけるねえ。ワリなんかおかしくって……」とたんにわたしの部屋に駆けこんで来た女が、「ちょいと、起きてよ。あんたのおつれよ。」「なんだ。」「いやだよ、このひとは、おちついてて。こまっちゃうわ。起きてったらさ。」これをしおに帰ろうと廊下に出て、「どうしたい、茂ちゃん。」「まあ、黙って。あたしに任しといて下さい、あたしに……」スウェターを著た男を壁ぎわに押しつけている茂市の腕に五十がらみの女がぶら

下るように取りすがって「およしなさいよ、にいさん。中どんに罪はないじゃないの。あたしがわるかったんだから、どうにでも顔を立てるわよ。こっちへ来てよ、こっちへ。」初めに通された階段のすぐ上の部屋にもどり、わたしが口の出しようもなくソファにかけて成行を見ているあいだに、立ちはだかった茂市が「甘くみるねえ、何だと思ってやがんだ。」「わかったわよ、にいさん。お見それしてすまなかったわね。これで我慢しておとなしく帰って頂戴よ。」「何も因縁をつけに来たわけじゃ……」「いいからさ、静かにしてよ。こりゃあたしの計らいなんだから、すこしでも我慢して……」「仕方がねえ。そういうんなら帰ってやろう。」階段のおりぎわに肩でわたしを突いた茂市がそっとあけて見せた掌には五十銭銀貨が数枚光っていた。外へ出ようとすると、店先に立っていた男たちの眼が獲物を待ちかまえたようにぎらりとして、向うの軒下電信柱のかげなどに二三人ずつかたまり合ってこちらを睨んでいたのはおなじ仲間であろうか、その殺気立った中を悠然らしく肩をそびやかした茂市とならんで数歩行き過ぎる後から、「おい、挨拶してかねえのかい、挨拶を。なんとかいってもらおうじゃねえか。」かつかつと靴の踵を鳴らしつつことさらに胸をそらして歩き出した茂市がまっすぐ向いたまま声をひそめて、「ふり返っちゃいけませんよ、ふり返っちゃ。黙って、黙って。」なおも吠え立てるさけびを背につい先の角を曲り大通に出ると、いきなり茂市が一目散に駆け出したのに、わたしも釣りこまれて駆けつづき、むらがるタクシイのライトの中、あちこちの露地の暗がりを夢中でくぐり抜け、急にしんと寝しずまった素人家の裏町に出てやっと足をゆるめ息をつきながら、「おい、たいへんな附合をさせるじゃないか。」「どうもすみません。ついはずみであんなことになっちゃって。でも思いがけず電車賃を稼ぎましたよ。ちょうどひどくシケてたところなんで……」ああ、これは何たるざまであろう、こんなはなしを口走るわたしもどうかしているが、そもそも此の如き汚点に満ちた世の中の地形こそわたしをして趣味に反してまでこの報告をなさしめる元ではないか、かくあさましき種族が蔓延しているこの国土の成行はどうなるのであるかと、今わたしは寓居の机に倚ってうんざりしながら、ついでにはなすつもりでいたある女のこと、かの小料理屋で逢った女のこともすでに感興をうしない、このようにむなしく道草を食っているひまに目下手を著けている歴史の詮索でもつづけたほうがはるかに性に合った役割であろうと、颯と頭を振って窓をあけ放ち、おりしも晴れわたった初夏の空を仰ぎながら、ここにわたしのおもいは十五世紀の初め仏蘭西ポアシイの僧院に於ける老いたる巾幗詩人、頽齢と戦禍のためにあわや絶えようとするたましいをふるい立て、最後の翅のはためきにジャンヌ・ダルク頌歌をうたい出でたクリスティヌ・ド・ピザンのうえに飛ぶ。

二

歴史家は何というか知らぬが、わたしはジャンヌ・ダルクの伝記を書くことなしにクリスティヌ・ド・ピザンの伝記を書くことができない。ということは……だが、はなしがお筆先にならないために、まずクリスティヌの素姓を略述しておこう。一三六三年ごろヴェネチヤの占星術師兼医師トオマ・ド・ピザンの娘に生れたクリスティヌが五歳になったとき、父のトオマがフランス王シャルル五世に聘せられ一家をあげてパリに移り、爾来クリスティヌは庭訓に恵まれ詩文の婦徳に資するあるものは博くこれを渉猟したと伝えられる。十五歳以前早くもフランス朝の廷臣の一人と結婚し、君寵の厚い父親とともに家は栄えたが、二十五歳のとき夫は三子を遺して早世、その後この女人の生涯は荊棘の路であった。これよりさき一三八〇年シャルル五世逝

き、支持者をうしなったトオマ・ド・ピザンもついで没していたので、運の目の変った中に三人の遺児と養うべき老母とを抱えた貧しい寡婦としては、はかなくも文章のたしなみを切売するほかに道なく、こうしてわれわれは数世紀の昔に職業的女作者の魁を発見する。最初に書かれたのが恋の詩であるにも拘らず、記録に依ればこの詩人の愛情はもっぱらわが子のうえにそそがれていたのみで、恋を歌うためには「詩人にてはたらじ、まず恋人にこそ。」というボアロオのことばとはおよそ相反するものであったそうだが、クリスティヌはやがて散文に転じ、しかもそれを金銭に換えるに際しては当時の習慣のごとく教会の援助に俟つことなく、かずかずの物語の写しを直接一般読者に頒って活計の手段を講じ、まことに作者みずから述べている通り「われ女なりしが男となり」おおせた傷心の変貌であった。これらの作品の価値については文学史家の筆に譲るとして、かほど懸命の努力をさえ無慙にも蹴ちらしたものは、ただ世路の艱嶮ばかりではなく、そのころフランスの国土を震撼した災禍の中に巻きこまれたためで、仔細は贅言におよばず、一四〇〇年前後にまたがる大事件といえば百年戦争の惨苦にほかならぬ。フランスの王位継承の権ありと称するイギリスは黒太子以来数十年懸軍海を越えてしばしば北辺を襲い、シャルル五世の没後シャルル六世狂疾を病んで内政大いに乱れるや北仏の地はまったく敵騎の蹂躙に委ねられ、一四二〇年代に入っては国王シャルル七世さえ安住の地なき世のすがたでは文章を粥ぐすべもあらず、クリスティヌはつとに難をポアシイに避け僧院に隠れる身の上となっていたが、かくて蟄居十一年、一四二九年五月初めて大天使聖ミカエルの天啓をこうむったジャンヌ・ダルクが古のシャルル・マルテルの武烈を伝える名剣を執って起つにおよびオルレアンの囲みは解かれ、ついでレンスに国王践祚の儀あり、捷報またポアシイにも至ったとき、今は老いさらばえた女詩人は七十年の精根をここに傾けて少女讃仰のために歌い出でた。やがて一四三一年五月三十日ルウアンに於ける少女刑死の後を追ってクリスティヌもまたほどなく没したという。

さて、わたしのクリスティヌ・ド・ピザン伝は詩人の生涯の最後からはじまる。古い玩具に、小さい紙の正方形の六面にそれぞれ異った絵の一部分を描き、その数個の各面を適宜に組み合わせることに依って六種の図柄をあらわす遊びがあるが、わたしはいかなる女に対しても、それが一つの絵であると同時に他のしかじかの絵を描き成すに至るであろう部分と見て、その渾然たる大図に参加すべき要素を探そうとする古風な癖がついているので、ここにジャンヌ・ダルクの神霊に通う頑朽の老女のたましいにふれることは揣らずも女性について語る契機となる。ジャンヌ・ダルクの出現をぽっかり宙に浮き出た荒唐無稽のまぼろしと眺め去ることなく、地上の塵にまみれ砕けた多くのクリスティヌの粉末が天日に舞いつどう花輪のけしきと観じつつ、逆に世のさまざまの女のすがたにジャンヌ・ダルクの一弁を拾い上げようとするのは愚かしいわざであろうか。オルレアンの少女とポアシイの老女とを併せ書こうとするのは塵と花とが吹きとじる変化微妙の女の顔を描き出そうというこころざしに発するもので、いささか跛の譬ながら、この二人女のあしらいはいわばわたしの趣向に係る見立寒山拾得である。寒山拾得が文殊普賢の化身ならば、文殊の智慧などおよびもつかぬ下根劣機の身としては寒山の真似よりもまず拾得の真似で、風にうそぶき歌う前に箒をかついで地を払う修業こそふさわしかろう。しかし、かりにも拾得の箒を手にした以上、町角の屑を掻きあつめるだけではすまず、文殊の智慧の玉を世話に砕いて地上に撒き散らすことこそ本来の任務で、それなくしてはこの世の荘厳は期しがたく、何もおのれが還相の菩薩だなどとうぬぼれている次第ではないが、そのうぬぼれの

かけらさえなかったとしたらばわが存在は空になるわけで、わたしの一挙一動が拾得の高風に似ても似つかぬ笑止の沙汰ではあるにもせよ、願わくはかの大士のおん振舞、おん身に於て百宝の花を放ちたまう菩薩の遊戯、馥郁たる普賢行につながろうとする一念を秘めていればこそ、前述の遊廓の件なども恬然とぶちまける勇猛心が湧いたのであって、今や普賢菩薩はわたしの守本尊となったのだ。

ここに下谷車坂の寓居の窓をあけ放ったわたしは机の前に坐り直し、しばらくおこたっていた草稿を取り出してつぎのように書きはじめた。

「歴史の詮索ということが単に伝説のぶちこわしに終るならばつまらぬはなしで、わたしはジャンヌ・ダルクの神託について小ざかしい解釈をつけようとは思わぬ。まして少女が恋愛のために通力をうしなったなどと称する俗説には荷担することができない。恋愛に於ける悲劇とはそれがために人間が堕落するからではなく、その翼に乗って高翔するに堪えない人間精神の薄弱に由来するものではないか。もしわたしが女鳴神の狂言を書いたとすれば、恋愛のために通力を増すところの美女を書いたであろう。それがひとの力をそこなうものならば、恋愛とはそもそも何であるか。ドムレミイの空の声からルウアンの火の柱に至るまで、ジャンヌはまさしく選ばれた女性であり、それゆえにこそ人類の歴史は美しいのだ。その美しさがないとすれば世のすべての女たちが美しくなりうる手がかりとてはないのみならず、この地上にはいつの日か沙羅の花がふるのであろう。詮索が誠らしく見え伝説が嘘らしく見えるということは、すなわち詮索こそ眉唾物だという証拠ではないか。さて、クリスティヌ・ド・ピザンは……」

そのとき、梯子を上って来る足音が廊下にとまって「ごめん下さい。」応えも待たず部屋の障子をあけたのはこの宿の女主人葛原安子で、外出と見える盛装にふくらんだ中年女の肢体を框いっぱいにはびこらせながら、「じゃ、ごいっしょに願えません。」「何です。」「あらきょうというお約束だったじゃありませんか。」「え。」「坂上さんに紹介して下さるっていう……」「あ、そうそう。」「いやですわねえ、お忘れになっちゃ。」「うっかりしてました。」「だめですわ。さあ、およろしかったら出かけましょう。お洋服、これですか。」「そんなにいそぐことはありませんよ。坂上は、三時ごろでなけりゃ事務所に来ないんですから。まだ正午を打ったばかりでしょう。」「でも、きょうでないと都合が……」「ええ、わかってます、行きますよ。ちょっと待って下さい。」

今ペンに興が乗って来たいきおいに乗じて、無味乾燥なわが文章にいろどりを添えるために華やかなオルレアン軍記を書くつもりでいたところへ急に横から顔を出したのにこうしてせっつかれたのではやむをえず中止するほかなく、クリスティヌ・ド・ピザンはさて措いて、わたしの知合の坂上青軒に紹介を迫る葛原安子について述べる羽目となったが、それにはあらかじめこの素人下宿のからくりをはなしておく必要があり、したがって二階二間の隣の六畳を借りているわたしの友だちの庵文蔵のこと、引いては文蔵の妹のユカリのことにもふれずにはすまぬであろう成行にのぞんで、はたと吐胸を突かれるのは、じつはユカリのことといえばわたしは魂きえる思いなのだ。だが、そこまで先まわりをしてはなしにかかる段になってはとても手みじかにかたづけるわけにはゆかず、当面の葛原安子にはしばらく下におりて待っていてもらわねばならぬ。

三

わたしがこの六畳に居をかまえたのはざっと一年前、最近かわった宿のあるじの葛原安子よりも古顔で、庵文蔵はわたしよりもさら

に一年ばかり前から住みついているのだが、こうして二階の下宿人は据置のまま肝腎の下の経営者が入れ替ったについては、まず先代の田部彦介のことから説きおこすのが順序であろう。

美しい壺はそれ一つだけで十分に美しいので対を求める要はないが、ありふれた壺をぽつんと一つ煖炉棚の上に置いても何となくおちつかず、似たようなのを二つならべるとどうやら見られるというのは、それがために品物が美しくなったからではなく、どうならべても引き立たぬ凡流の中に落ち合ったそのけしきが一興なのであろうか。これはドン・ジュアンにスガナレルとかドン・キホオテにサンチョ・パンサとかいう対照の妙とちがって、田部彦介と前述の垂井茂市とは人物のほうでひとりでに吸いついてしまったかたちに見えるのも、そもそもこの二人を知ったのが同時であったせいかも知れぬ。ところでその彦介のはなしであるが、もう四年ほど前わたしが浅草公園にぶらぶらしていたころ、今は関西に落ちている友だちの喜劇役者が、「きみ、小鳥がわかるかい。」「もちろん。」「じゃ、附きあってくれ。」「どこへ。」「日暮里だ。」「どうするんだ。」「小鳥を買うんだ。」「鳥屋か。」「いや、素人なんだが小鳥が好きでたくさん飼ってるんだそうだ。田部ってひとだがね、こないだわきで紹介されたんだ。ついでに犬も買おうかと思う。」「犬も売ってるのか。」「これも売ってるわけじゃないが、二三匹いるそうだ。」行った先の日暮里の曲りくねった道をたどって尋ねあてた町の角、低い檜垣で仕切った百坪ほどの一劃にいずれも平家建三間ぐらいの小家が四軒、安普請ながら表に面した三軒は洋館まがいの窓をつらね、家と家とのあいだは通り抜けのできる狭い露地が走り、露地の奥に井戸があり、井戸のそばに押し詰められた格子戸の一軒が田部の住居で、信州沓掛の資産家の次男に生れた彦介が最後に剰しえた財産はこの四軒長屋ばかり、住居のほかの三軒から上る家賃が現在唯一の収入であることは後になって知ったのだが、そのときわたしたちが露地にはいりかけると、井戸端で肌著一枚になった三十五六の男が、おりから早春の風にひゅっひゅっと口笛を吹きながら、エアデル・テリヤの大きいのとフォックス・テリヤの小さいのが足に搦まるのを制しつつ、二つの洗面器に分けた汁掛飯を箸で掻きまわしていたが、足音にこちらをふり向くと小ぶとりのからだを鞠のように跳ね上らせ、「や、これは、おいでなんし。さあ、こちらへ、こちらへ……」とみじかい髭の生えた唇をそらしてせわしなくしゃべりつづけ、「さ、さ、早く食え、早く。」犬の背を叩いて洗面器を押しつけると、がちゃがちゃと井戸のポンプを突いてはだしの泥をこすりながら、「お組、お組、いねえか、おめえ。」硝子の格子戸の横手につづくこれも硝子の二間窓が力なくあいて、色あせた窓掛のかげから、ぞっとするほど顔の蒼い、白眼がどろりと淀んだ、かげろうのように痩せおとろえたのが垂れさがる髪を黒く細った指で掻き上げつつ、「どうしたの、あんた。」とこれはひどくおちついたものでひややかな一瞥をわたしたちに投げ、「なんてさわぎするの。」「たいへんだ、お客様だ。」「何がたいへんなのさ、お通ししたらいいじゃありませんか。」

通された部屋の真中に半畳の大きい炬燵が切ってあるのは生国の習慣か、三月とはいえまだ寒い日のためにふさがずにいるのであろう、そのやぶれた掛蒲団をまくって火をほじっている相手に喜劇役者が、「おかまいなく、田部さん。」「いえ、さあこちらへ、どうかおたいらに。」西向の表から上ってすぐこの六畳の南側は低い桓根ごしに隣の庭に接し、北側は台所につづいて三畳ほどの小部屋とおぼしく、入口わきの硝子窓の部屋、病人らしい女のいるその部屋もやはり三畳ほどと察せられたが、ともに襖が立てきってあるので中は見えず、総じて襖も畳も泥だらけなのは犬どものしわざであろうか、おまけに炬燵の上に

は猫も乗っている有様、家具といっては古めかしいぼんぼん時計のほかに意外にもみごとな赤絵皿の二三枚が壁に懸っているばかり、それよりも眼をおどろかすのは表の土間はもちろん部屋いっぱいに吊られた棚の上にぎっしりならんだ鳥籠の数で、まず九官鳥、そのころ時花の胡錦鳥、十姉妹、ローラ・カナリヤ、ほかに駒鳥、ひがら、四十雀、眼白、紅雀のたぐい、藪とはいえ鶯までひしめきあい、ちいちいとさえずる音にはなし声さえも消されがちで、これは常ならぬけしきであった。

「どうも大したもんですね。」と大仰に感心して見せた喜劇役者に、「なあに、これでもだいぶ減ってますんで。もとは猿もいましたよ。」「へえ。」「ちかごろは小鳥のほかに犬が二匹。もう一匹いたんですが、こないだよそへ譲りましたんで。それにこの猫……」「よく猫が小鳥にかかりませんね。」「それがね、不思議にうちの小鳥とは仲がよござんして。その代り近所の台所を荒すんでよく尻をもちこまれます。」「ははあ。」「どれでもお気に入ったのがあったらおもちになって下さい。それに、うちには人間もごろごろしてますんで、これもひとつ公園あたりで使っていただければ……」「御家族おおぜいですか。」「いいえ、うちのものは女房ひとりでして、そこに（と西側の襖をさして）寝ておりますが、取りみだしておりますんで、御挨拶にも出ませんで失礼を……」「どこかおわるいんですか。」「なあに……」とことばをにごしながら、「どうも、あたしんとこにゃ、よく友だちがあつまって来ましてね。そこにも（と北側の襖をさして）ゆうべの飛入がひとりまだ寝てます。もうひとり、ずっと居ついてるのがあるんですが、これは今ちょっとそこまで。この男はH大学を中途でよして、思わしい職がなくってぶらぶらしてるんですが、ただ魚の見分がとてもうまい男でしてね。市場なんかへ行って盤台をじろり睨むと、あれはばちだとか、あれは三崎とか房州とか一眼でちゃんとわかっちまうんです。もっともここへ来る前に魚屋の二階に居候してたんで……」

ところへ、時花唄とともに下駄を引きずりながら、よごれた縞のオーヴァ・オールを著たのが縁側のほうからぬっとはいって来て、手にした一升壜と紙包をどさりと置くと、「彦さん、不漁でなんにもなかったから蟹の鑵詰を買って来たぜ……あ、お客様か。やあ、いらっしゃい。」と初対面の挨拶も旧知のごとく、「ちょうどよかった。さっそく一杯さし上げるか。」「そうだ、お茶代りに。」と彦介も浮き立って、「じゃ、きみに支度を頼む。ぼくはここをかたづけとくから。」あっけにとられたわたしたちを前にして、彦介が雑巾で炬燵板を拭きはじめると、ひとりは台所へ、やがて皿小鉢を載せた大きい塗盆を持って、「へえ、お待ちどおさま。」とあらわれた、これが垂井茂市で、炬燵の片隅に割りこむと、「さあ、どうぞ、何もありませんが。」「ときに。」と彦介が、「まだ起きないかね、あっちは。」「さあ。」と茂市は炬燵に足を入れたままあおむけに倒れ、伸ばした手で北側の襖をばたばた叩きながら、「どうです、起きませんか。え、起きたらどうです。酒が来ましたよ、酒が。」「ううん。」とうなるけはいがして、「じゃ、起きよう。」「あれだ。無理に起きないでもいいんですよ。飲んでくれなくたってこまりゃしねえや。」建附のわるい襖が軋って、突き出した髪の毛をぶるっと一ふるい、眉に八の字を寄せながらどてらの襟を掻き合せ鼈甲縁の眼鏡を揺り上げた、その顔を見て、わたしが「あっ」とさけぶと先方も、「や、きみか。」「どうした、死んだんじゃなかったのか。」「何をいう。そう簡単にくたばるか。」「どこにいたんだ、今まで。」「国さ。ゆうべ出て来たんだ。」かねて死亡を伝えられていた旧友庵文蔵と、わたしはここでゆくりなくめぐり逢ったのだ。

庵文蔵とわたしとの交友のはじまりはもう十何年か前某私立大学の校庭に於ける出逢に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com